

伝後鳥羽天皇筆「拾遺和歌集切」新出断簡に対する一考察

井田 明宏^a, 渡邊 恵理香^bA Consideration of the Recently Discovered *Shui waka shu* Poetry Anthology Segment,
Attributed to the Emperor GotobaAkihiro IDA^a, Erika WATANABE^b

要 旨

本稿は伝後鳥羽天皇筆「拾遺和歌集切」（以下、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集）の新出断簡が、既出断簡と同筆であるかを分析するとともに、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集がいかなる伝本系統に位置づくか、またその書写年代はいつ頃かについて、書学、文献学の両側面から考察を試みるものである。

結果、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の新出断簡は既出断簡と同筆であることが確認できた。伝本系統では定家本系統の内、集付に特徴のある算合本系統に位置づることが明らかとなった。書法、伝本系統、仮名遣などの調査を踏まえ、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写年代が鎌倉時代、天福年間以降、それに近い時期である可能性を提起した。

伝後鳥羽天皇筆本拾遺集は今後も新たな断簡の発見が期待されるものであり、本稿の手法はそれら新出断簡の分析に応用できる。また、資料数が少なく全容が不明瞭である算合本系統に対し、その一端を明らかにする手がかりを得たことにも本稿の意義がある。

キーワード：拾遺和歌集、古筆、後鳥羽天皇

はじめに

後鳥羽天皇は鎌倉時代を代表する能書の一人である。その宸筆として熊野懷紙（陽明文庫ほか蔵）や御手印置文（水無瀬神宮蔵）などが挙げられる。一方、後鳥羽天皇を筆者として伝称されてきた古筆切も数種が知られている。本稿ではそのうちの一つ、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集に注目する。

小松茂美『古筆学大成』を見ると、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集として3葉の断簡が収載されている¹⁾。これらは別々の手鑑に貼られているとされるが、現在その収蔵先は不明であり、これら3葉を実見することは難しい。

伝後鳥羽天皇筆本拾遺集について小松氏は、書法の特徴からして鎌倉時代中期の書写であること、算合本系統の新出伝本であることを指摘している²⁾。しかし、伝本系統に対する検討では同じく算合本系統に属する伝冷泉為秀筆本（以下、静嘉堂本）との比較を行っておらず、本文の内容および仮名遣に対する検討もされていない。また、書法に関する考察にも検討の余地が残されている。これらの課題は伝後鳥羽天皇筆本拾遺集とされる断簡の少なさに起因するもので、新たな断簡の発見とそれに対する検討が必要不可欠である。

このような状況の中、令和3年3月から4月にかけて、筆の里工房（広島県熊野町）で開催された展覧会「大内基康コレクション寄贈記念展」において、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の新出断簡が展示され、展覧会図録に載録された³⁾。ただし、この展覧会および図録では、新出断簡が『古筆学大成』所収断簡と同筆である可能性に触れるのみであり、詳細な書法分析はなされていない。

そこで本稿は新出断簡を含めた伝後鳥羽天皇筆本拾遺集について、書学と文献学の両側面から考察し、その実像の一端を明らかにすることを目的とする。書学の面からは、新出断簡に対する実見調査、および書法分析を行い、新出断簡が『古筆学大成』所収断簡と同

^a安田女子大学文学部書道学科

^b安田女子大学文学部書道学科（令和5年度卒業）

筆か否かを考察する。また、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集と後鳥羽天皇宸筆との書法比較を試み、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写者を後鳥羽天皇とすることが妥当であるかどうかを検討する。文献学の側面からは、新出断簡を含む伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の伝本系統上の位置、および仮名遣に注目し、文献としての伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の性質、および書写年代を考察する。その際、同様の集付を有する算合本系統の諸伝本との関係については、特に重点的に取り上げることとする。

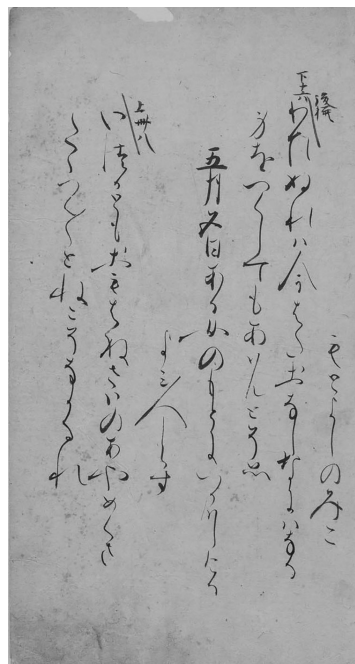
1. 新出断簡に対する書法分析

(1) 新出断簡、および既出断簡の概要

本稿の執筆に際し、新出断簡の実見調査の機会を得た。以下、実見調査で得られた成果に基づいて、新出断簡の概要を記す。

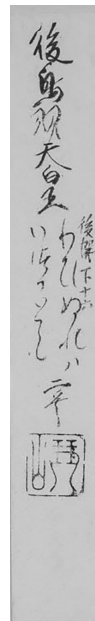
新出断簡の寸法は縦22.0cm、横11.5cm。台紙に上部が糊付けされた状態で現存している。少し厚めの茶褐色の素紙であり、紙質は不明である。経年による皺、傷みはあるものの、紙面は平滑に処理されており、切れ味のある線質での書写に適する紙である。墨色は比較的濃く、カスレはごくわずかに看取できる程度である。小松氏は元々上下冊の冊子であったと推測しているが⁴⁾、この新出断簡には冊子であったことを示す痕跡は確認できない。なお、書写されているのは拾遺和歌集巻第十二、766、767番歌⁵⁾である。釈文は上掲図1に付記した。

図1 伝後鳥羽天皇筆本拾遺集 新出断簡 (①)



上冊八
下十六
後撰
（釈文）
わびぬれば今はたおなじなにはなる
身をつくしてもあはんとぞ思
五月五日ある女のもとにつかはしける
よみ人しらす
いつかともおもはぬさはのあやめぐさ
たゞつくぐとねこそなかるれ
もとよしのみこ

図2 極札



新出断簡には極札1枚が付属している（図2）。縦14.5cm、横2.0cmであり、これは一般的な極札のサイズと言える。新出断簡と同じ台紙に全体が糊付けされた状態で貼り付けられており、裏面に押される鑑定者の私印を確認することができない。表面の書風や書式、極印などから類推するに、古筆本家第13代当主、古筆了信（1876～1953）の書写した極札である可能性が高い⁶⁾。

新出断簡の伝来については極札以外に情報がなく、その詳細を辿ることは難しい。既出断簡がいずれも手鑑に貼られていること、新出断簡には極札以外に付属品がないことから、新出断簡もなにかしかな手鑑に貼られていたものかと思われる。ただし、新出断簡の裏面の糊付けされていない箇所を実見したところ、左右および下部に糊付け跡が見られないため、手鑑に貼られていたことを示す証拠はない。

次に『古筆学大成』所収断簡を以下に挙げる。なお、これ以降、各断簡にはそれぞれ番号を付すこととする（新出断簡は①とする）。各断簡の詳細については、文末の資料1「伝後鳥羽天皇筆本拾遺集現存断簡概要」を参照。

図3 既出断簡(②)

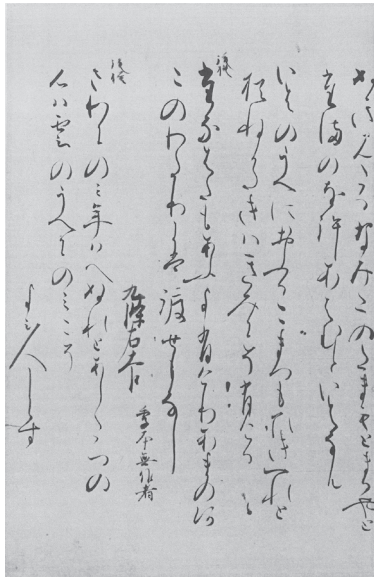


図4 既出断簡(③)

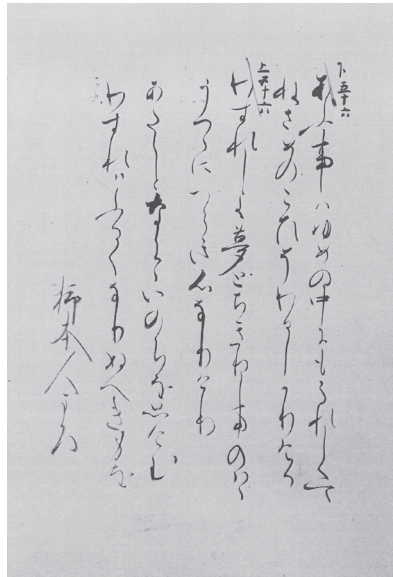
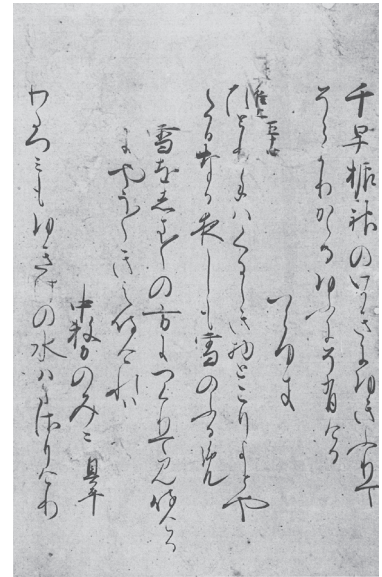


図5 既出断簡(④)



(2) 新出断簡と既出断簡の書法比較

次に新出断簡と既出断簡を比較し、それらが同筆であるか否かを検討する。本稿での書法分析では、書写形式と書法(筆法、連綿)の2項目を設け、それぞれ比較を試みる。

【書写形式】

本項では各断簡の寸法(本紙、行の高さ、幅など)、各行の字数、詞書や歌人名の書写される位置など、書写形式について比較する。

〈1〉寸法、各行の字数

前項でも確認したように、①の寸法は縦22cm、横11.5cmである。それに対し、②~④の平均を算出してみると、縦21cm、横13.8cmとなる。およそ1~2cm程度の差があるが、断簡は改装される際に上下左右が切除されることがあるため、1~2cm程度の差は起こり得る程度の範囲内に留まるものと思われる。

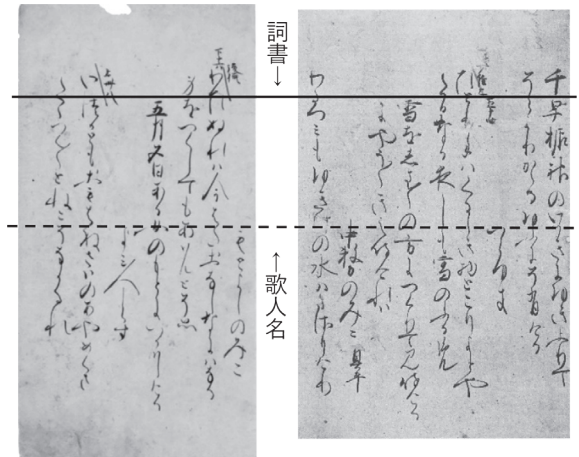
各断簡に書写される歌は1首を2行で書写されている。行の幅はいずれも2~3cmの間で収まっており、各断簡の間で大きな差はない。各断簡の冒頭に書写されている歌の1行目の長さを計測したところ、①は16cmであるのに対し、②~④の平均も16cmであり、ほぼ同様である。また、計測した行に書写される字数を数えると、いずれも16字前後であり大差はない。

以上より、全体の寸法、および歌の書写形式の観点において、各断簡はほぼ同様の特徴を持つと言える。

〈2〉詞書、歌人名の書写形式

詞書、歌人名両方を有する①と④に注目し、それぞれの書写される位置を比較する。

図6 詞書、歌人名書写形式比較(①、④)



先の検討により、歌の行の長さは同様であることから、①と④の歌の位置を合わせ、詞書、歌人名の書き出しの位置に補助線を加えた(図6)。詞書の書き出しの位置は、歌の書き出しの位置より約1文字分下げた場所であり、これが両者で一致した。また、歌人名の書き出しの位置は本紙上下幅に対してほぼ中心付近に位置しており、これが両者で一致した。なお、②、③の歌人名の位置もこれと同様である。

以上より、各断簡の書写形式は共通した特徴を有することが明らかとなった。この結果は、4葉の断簡が同一の書写者によって書写されたことを示す有力な傍証であると言える。

【書法】

伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書は鋭い線質と縦長の字形が特徴的な書風であり、これが4葉においてほぼ共

通している。調査の際、各断簡の文字を全てトリミングし、データベースを作成した。ここではいくつかの例を示しながらその書法を比較するとともに、連綿にも注目して4葉の共通点を確かめたい。

図7 伝後鳥羽天皇筆本拾遺集文字比較

字母	①	② ③ ④
あ (安)		
お (於)		
さ (左)		
つ (川)		
な (奈)		
ね (柰)		
の (乃)		
み (美)		

図7で示した各文字は、特に字形に特徴のあるものである。それを見ると、新出断簡と既出断簡の字形の特徴がほぼ共通することがわかる。例えば「お(於)」は、2画目の縦画から続く右旋回部へ移行する部分において、上方向からの筆脈を逆筆で受け止めており、アタリが明瞭に看取できる。この運筆は通常の場合とは異なっており、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集に特有の書法と言える。また、「み(美)」の1画目、旋回後の右方向への横画が、急激な右上がり、右下がりによって山なりの形状となっているが、これも新出断簡と既出断簡に共通する特徴と言える。そのほか、「さ(左)」 「な(奈)」 「ね(柰)」 など、共通する字形の文字は多く看取される。

次に複数の文字に共通する特徴を挙げる。例えば

「あ(安)」 「つ(川)」 「の(乃)」 には旋回部分があるが、その右上部に注目すると、筆が急激に浮き上がり、点画が途切れるほど細くなる。また、「あ(安)」 「お(於)」 「つ(川)」 の左払いには、払い出しの直前に筆圧が加わって太くなるものが共通して看取できる。これらはともに筆圧の変化に起因するものであり、4葉の書写者に特有のものと考えられる。

また、各断簡の線質に注目すると、打ち込むように鋭い起筆(「さ(左)」 「つ(川)」 等)や、切り込むように軽く鋭い点画(「あ(安)」 「の(乃)」 等)に特徴がある。これらは筆の穂先が点画の外へ現れた露鋒や、筆管が傾くことによる側筆を主体とした筆法によるものと考えられ、4葉の書写者の筆法の特徴と考えられる。

次に連綿に注目する。本稿では連綿のうち、実線で連続するもの(形連)を4つの形式に分類し⁷⁾、各断簡における各形式の出現回数を計測して使用傾向を検証した。その結果を表1にまとめた。

図8 連綿の4類型

I 基本連綿	
	上の字と下の字の中心を通すようにして続ける。
II 中心移動連綿	
	下の字を左右のどちらかに寄せ、上の字から続けやすくする。
III 傾斜連綿	
	上の字を右に傾け、収筆を下の字の起筆に近づける。
IV 省略連綿	
	上の字の収筆から、同じ筆圧ですぐ下の字の起筆に続ける。

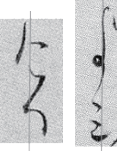
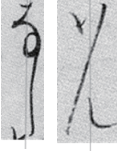
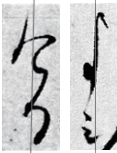
表1 連綿形式の出現回数と割合

断簡	連綿形式	I	II	III	IV
①	出現回数	12	4	0	7
	割合(%)	52	17	0	30
②	出現回数	16	9	2	4
	割合(%)	51	29	6	12
③	出現回数	7	8	2	6
	割合(%)	30	34	8	26
④	出現回数	10	11	3	2
	割合(%)	38	42	11	7
②③④ の平均	出現回数	33	28	7	12
	割合(%)	41	35	8	15

※小数点以下、切り捨て

ここから、I 基本連綿を用いることが多く、III 傾斜連綿を用いることが少ないことがわかる。基本連綿を多く用いることで行の中心を通すように書きする傾向にあることがわかる。ただし、II 中心移動連綿、IV 省略連綿においては新出断簡と既出断簡の間に使用頻度の差が指摘できる。この2つの形式の連綿について、書法的特徴にも着目してみたい。

図9 連綿II、IV 書法比較

連綿形式	II	IV
①		
②③④		

II「け(介)る」「よみ(三)」の連綿の起点(上の文字の終わり)と終点(下の文字の始まり)の位置を比較すると、①とその他の間に大きな差異はなく、ほぼ同一である。IV「な(奈)し」にも同様のことが言えよう。IV「は(八)ん」「めの」の連綿線は、いずれも太さの変化が少なく、一気呵成で力強い。このように、使用頻度に差のある形式であっても書法の観点でみると、新出断簡と既出断簡との間に共通した特徴

が見出せる。

また、連綿の字数も確認してみたい。

表2 連綿の字数

連綿の 字数	断簡ごとの使用回数			
	①	②	③	④
2字	20	19	13	11
3字	2	9	3	8
4字	1	2	3	8
5字	0	0	1	1
6字	0	0	0	1

新出断簡、既出断簡ともに2字連綿が多い。4字を超える長い連綿は3例しか見られず、全体的に長い連綿を避けて短い連綿を多用する傾向にあることがわかる。

以上、書写形式と書法に対する検討により、新出断簡と既出断簡の共通点を多く指摘し得た。よって本稿ではこれら4葉の書写者は同一であったと考えたい。

(3) 後鳥羽天皇宸筆との比較

前節において4葉の書写者が同一であると判断できたが、その書写年代を小松氏の言う鎌倉時代中期頃と判断するためには別に検討が必要である。その際、伝称筆者である後鳥羽天皇の書法との比較により、共通点、相違点を明らかにする必要がある。そこで後鳥羽天皇の宸筆である御手印置文との比較を行い、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写者を後鳥羽天皇とすること、およびその書写年代を鎌倉時代中期とすることの妥当性を考察する。

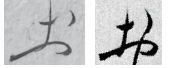
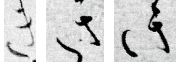
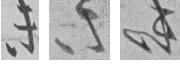
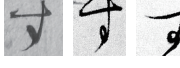
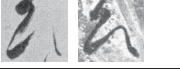
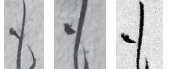
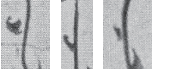
比較対象とする御手印置文は、後鳥羽天皇(書写時は院)が左右の手印を押して藤原(水無瀬)親成に宛てた置文であり、隠岐において崩御する13日前の宸筆として著名である。側筆で太く書いた文字が多く、漢字、仮名ともに筆力が充実し、筆鋒が露わでメリハリの効いた書風であり、鎌倉時代に盛行した書風の代表例として評価されている⁸⁾。

この御手印置文を比較対象としたのは、鎌倉時代を代表する能書である後鳥羽天皇の自筆であること、文字の大きさや形式が比較に適當であることなどを勘案した結果である。以下、前節で挙げた伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書法的特徴と照らし合わせ、文字ごとと連綿とに分けて比較を試みる。

【文字】

御手印置文の文字を全て抽出し、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集と比較した。以下、その一部を示す。

図10 文字比較

字母	伝後鳥羽天皇筆本拾遺集	御手印置文
安		
於		
幾		
寸		
比		
毛		

比較すると両者には多くの相違点が見出される。図10「お（於）」「す（寸）」「ひ（比）」のように字形が大きく異なる文字が見られる。また、御手印置文は筆の開閉による点画の変化、側筆の強調など、多彩な筆法が看取できて巧みであるのに対し、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集は筆力や変化に乏しい印象を受ける。よって両者を同一の書写者と見做すことは困難だろう。

一方、側筆、露鋒を主体とした鋭利な線質や図10「あ（安）」「き（幾）」「も（毛）」の字形など、両者に共通する特徴も指摘できる。もちろん、藤原定家のような扁平な字形の書も同時代には認められるが、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集と御手印置文の共通性は、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集が後鳥羽天皇に近い時期の書写である可能性を示す傍証と考えられる。

【連綿】

連綿については形連に着目し、前節で整理した連綿の形式とその出現頻度、連綿の字数について比較する。

表3 連綿形式ごとの出現回数、割合

	連綿形式	I	II	III	IV
伝後鳥羽天皇 筆本拾遺集	出現回数	45	32	7	19
	割合(%)	43	31	6	18
御手印置文	出現回数	25	26	0	11
	割合(%)	40	41	0	17

※小数点以下、切り捨て

表4 連綿の字数ごとの出現回数、割合

	連綿の字数	2	3	4	5	6
伝後鳥羽天皇 筆本拾遺集	出現回数	63	22	14	2	1
	割合(%)	61	21	13	1	0
御手印置文	出現回数	28	17	9	7	1
	割合(%)	45	27	14	6	1

※小数点以下、切り捨て

連綿形式の出現回数を比較すると、Ⅰ基本連綿やⅡ中心移動連綿が多く、Ⅲ傾斜連綿が少ないという全体的な傾向はおおむね一致している。また、連綿の字数では両者ともに2字連綿が最も多く、3字以上を連続させるものの出現回数は減少することがわかる。5字連綿の使用回数において御手印置文が比較的多いことが気にかかるが、これはいずれも一文節を全て連綿させているものである。書状と歌集という書写内容の違いによるものかもしれないが、これについては別に稿を設けるべきであり、本稿での詳述は避ける。以上のことから、連綿形式、字数の観点において両者は同様の傾向を有すると考えられる。

文字の検討と合わせて考えると、両者の書写者は同一であるとは言えないため、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写者を後鳥羽天皇とすることは、あくまでも伝称に留めた方がよいだろう。ただし、両者は書法的特徴をある程度共有することから、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集が鎌倉時代頃の書写である可能性は高い。

2. 伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の伝本系統上の位置

拾遺和歌集の現存伝本は、天福元年（1233）の紀年をもつ藤原定家自筆本拾遺和歌集（以下、定家自筆本）に連なる系統（以下、定家本系統）が多いとされるが、それとは異なる異本系統も存在する。伝後鳥羽天皇筆本拾遺集がいずれの系統に属するかを確かめる必要がある。また、定家本系統の中にもいくつかの伝本系統があり、特に集付に特徴のある算合本系統の伝本との関係は重要である。本節ではこれらについて整理し、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の伝本系統を明らかにしたい。

（1）伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の伝本系統

拾遺和歌集の伝本系統は片桐洋一氏に詳細な論考があり、定家本系統、異本第一、第二系統の3つに区分される⁹⁾。

定家本系統は定家自筆本を祖本とする系統で、冷泉

家、二条家ともに、これに基づく伝本を家学の証本としたことから、現存する伝本の約9割が定家本系統に位置づくとされる¹⁰⁾。なお、この定家自筆本は冷泉家時雨亭文庫に蔵されており、その全容は平成2年に公開された¹¹⁾。公開以前、定家自筆本の底本として知られていた高松宮本や中院通茂自筆本等は、いずれも定家自筆本を祖本としている。

異本第一系統は松田武夫氏が初めて指摘したもので、堀河宰相具世筆本（宮内庁書陵部蔵）が唯一の完本である¹²⁾。また、片桐氏は天理図書館所蔵の甲乙本、多久市立図書館本なども同様の系統に分類している。

異本第二系統は片桐氏が指摘した系統で、京都市北野天満宮本が唯一の伝本とされる。

これら3系統の本文と、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の現存部分の本文との異同を調査した。結果は文末の資料2「伝本系統異同対照表」を参照。これを見ると、定家本系統との異同が最も少なく、異本第一、第二系統との異同はともに多いことがわかる。また、異同の内容に注目すると、定家本系統との異同は漢字、仮名の表記、および集付の表記に限られており、語句の異同は見られない。よって、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集は定家本系統の伝本と言える。

（2）算合本系統と伝後鳥羽天皇筆本拾遺集

伝後鳥羽天皇筆本拾遺集と定家自筆本の集付の表記における異同は注目すべきである。資料2を見ると、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の集付は定家自筆本と比べ、より具体的な歌番号が記載されている。この集付の表記内容については北野克氏による家蔵の伝本（北野氏は算合本拾遺集と称しているため、本稿では以下、算合本と称する）を基にした論考がある¹³⁾。北野氏は定家自筆本奥書の「又算合抄之証本」という一文に注目し、「算合」は定家が拾遺和歌集を書写した後に行った、拾遺抄証本の歌順と照合する校訂作業であり、それを集付に数字を加えて示した伝本が存在することを指摘した。その集付をもつ伝本を「算合本系統」と称している。伝後鳥羽天皇筆本拾遺集も算合本と同様の

集付を有することから、算合本系統に連なるものと考えられる。

また、北野氏は算合本と定家自筆本との異同を調査し、算合本は定家自筆本に近いとした。同時に、算合本には定家自筆本が定着する天福元年以前に、定家が書写した伝本（貞応二年本など）の中の語句が散見されることも指摘し、算合本は定家自筆本が定着に至る以前の定家の校訂家本を祖本とするものとする¹⁴⁾。これに從えば、算合本は定家本系統の一つであり、算合本系統も定家本系統の一支流とすべきこと、算合本は定家本系統の中でも比較的古い本文を持つものと言えるだろう。

なお、算合本の書写者は明らかでないが、田中親美氏、土岐善磨氏によって鎌倉時代中期は下らない頃の書写とされている¹⁵⁾。

他の算合本系統の伝本として、静嘉堂文庫が所蔵する静嘉堂本がある。これも定家本系統の本文を持つとされ、その書写年代は南北朝時代頃とされる¹⁶⁾。北野氏は算合本の欠を静嘉堂本で補う試みをなしているが、書写年代が大きく異なるために、本文の異同が指摘されている¹⁷⁾。

これら2本の算合本系統伝本と、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集との関係を検討するため、異同箇所を確認する。なお、定家自筆本も比較の対象に含めた。結果は文末の資料3「算合本系統伝本異同対照表」を参照されたい。

比較の結果、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集は算合本と最も近い関係にあることが明らかとなった。また、静嘉堂本との異同を見ると、649番歌「この涙」のような誤字や、1152番歌「わたつみの」のような助詞の異同など、文字の表記を超える異同が散見される。さらに650番歌に付される「季本無作者」という注が静嘉堂本には見られない。

この「季本」に関する注は定家本系統に共通して見られるものであるが、その内容は諸先行研究でも注目されている¹⁸⁾。ここでは試みに、定家自筆本、算合本、静嘉堂本、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の季本関係注に注目してその異同の関係を見てみたい（表5）。

表5 季本関係注表記対照表

歌番号	定家自筆本	算合本	静嘉堂本	伝後鳥羽天皇筆本拾遺集
542	御息所事無所見。諸本皆同。	注なし	注なし	
	村上麗景殿代明女也。		付（村か？）上麗景殿女御は代明女也。重明女は承香殿也。此作者可尋。	
	季本麗景殿女御重明親王女。		季本麗景殿女御重明親王也。	
	延喜御時歟。麗景殿可勘。		延喜御時、麗景殿未勘。	
634	注なし	季本無作者	注なし	
650	注なし	季本無作者	注なし	季本無作者
1120	季本そわきくしかみ	季本そわきく	「そかきく」に注なし 「しけみ」に「か」の注あり。	

伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の季本関係注は、既出断簡②、650番歌に付されたもののみ確認できる。これを同様に有するのは算合本のみである。また、算合本にのみ見られ、定家自筆本と伝後鳥羽天皇筆本拾遺集には見られないもの(634番歌)や、定家自筆本と算合本に一部共通して見られるもの(1120番歌)などがあり、3本の関係性は比較的近いと考えられる。異同の交錯の裏には、北野氏が指摘するように算合本が定家自筆本完成前の校訂家本をルーツに持つことが想定されうる。伝後鳥羽天皇筆本拾遺集もこれらに近い可能性は高い。

一方、時代が下るとされる静嘉堂本であるが、他本と比べて異同の内容に距離がある。542番歌上部に付された注に着目すると、定家自筆本では「村上麗景殿代明女也。季本麗景殿女御重明親王女。」とあるのに対し、静嘉堂本では「村上麗景殿女御は代明女也。重明女は承香殿也。此作者可尋。季本麗景殿女御重明親王也。」とあるように、定家自筆本の注を補足するような記述がなされている。また、542番歌下部に付された注を見ると、定家自筆本では「延喜御時歟。麗景殿可勘。(延喜の御時か。麗景殿勘うべし。)」とあるのに対し、静嘉堂本では「延喜御時、麗景殿未勘。(延喜の御時、麗景殿未だ勘えず。)」とあるように、文意が不明となっている。さらに、静嘉堂本には「季本無作者」という表記も見られず、1120番歌に付される内容も割愛されている。

以上から、静嘉堂本は定家自筆本の注に従いながらも、内容を取捨選択、補足していると考えられる。静嘉堂本が南北朝時代の書写であり、注の改変も時代が下ったことが関係するならば、改変が見られない伝後鳥羽天皇筆本拾遺集は、定家自筆本や算合本が書写された、鎌倉時代頃のものとするに、ある程度の妥当性が認められるのではないだろうか。

3. 伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の仮名遣

前章までの考察により、書法、伝本系統において伝後鳥羽天皇筆本拾遺集が鎌倉時代頃の書写である可能性が示唆された。本章では主に仮名遣に着目して伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写年代を知る更なる傍証を得たい。

【字母】

まず、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の各断簡に使用される字母に注目する。使用字母の一覧は文末の資料4「伝後鳥羽天皇筆本拾遺集使用字母一覧」を参照されたい。

各断簡の字母数は①36、②44、③39、④40であり、

いずれも同程度と言える。ここからも4葉が同筆であることを推知できよう。また、4葉に使用される字母数の総計は60である。平安時代に使用されていた字母数は約300とされ¹⁹⁾、その中でも使用字母数が少ない高野切古今和歌集第二種の字母数は76とされる²⁰⁾。字母は時代を経るごとに次第に整理されていく傾向にあることからすると、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写年代を平安時代まで繰り上げることは困難だろう。

鎌倉時代には、藤原定家とその近親者、および側近らによって数多くの写本が書写されたが、それらに使用される字母数は最大113、最少52であるとされる²¹⁾。なお、定家自筆本では、巻頭から巻八雑上までの間に108の字母が確認されている²²⁾。前章で見たように定家自筆本と伝後鳥羽天皇筆本拾遺集は近い関係にあると考えられるが、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の現存数が限られ、確認できる総字数が少ないために、字母数のみでは両者の関係を考察し、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写年代を推測することは難しい。そこで字母の出現傾向にも視野を広げてみたい。

近年、齊藤鉄矢氏の論考に、写本の字母の出現傾向に対して計量的な調査を加えることで、書写者同定や書写年代推定を試みる一連の研究がある。齊藤氏は鎌倉時代から室町時代にかけて書写された『源氏物語』の写本を取り上げて計量的に分析し、字母の出現傾向から各時代に出現する特徴的な字母37種類を指摘している²³⁾。それによれば、鎌倉時代に特徴的な字母は、「え(江)・け(遣)・し(新)・す(數)・せ(勢)・そ(所)・た(堂)・に(二)・は(半)・へ(邊)・も(无)・も(母)・る(累)」の13種類である。このうち、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の断簡に見られる字母は「た(堂)」の1種類で、出現回数は2回である。また、齊藤氏は、藤原定家の写本の書写年代と字母の使用傾向について分析しているが、これによれば「た(堂)」は天福年間に頻出する字母とされている²⁴⁾。さらにこの字母は定家仮名遣においても注目されており、これについては次項でも触れたい。

一方、室町時代に特徴的な字母として24種類が挙げられているが、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集には「ね(年)」が1回出現する。よって、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の字母の使用傾向は鎌倉時代の特徴を示すものの、これのみでは明確な判断を下すことができない。そこで、定家仮名遣の使用状況についても考察を広げてみたい。

【定家仮名遣】

定家仮名遣については多くの研究者による論考があり、その特徴が指摘されてきた²⁵⁾。それらの要点をまとめると以下ようになる。

- ・「お」と「を」をアクセントによって使い分ける。
- ・「お」と「を」に関わる掛詞の際に補助字形²⁶⁾「越」「乎」を使用する。
- ・「え」と「江」(「きこ江」の場合のみ)を使い分ける。
- ・文節頭を示す字母「加・志・堂・止・布」と文節末を示す字母「須・那・仁・二・八・盤」を使い分ける。
- ・文節頭、文節末を示す仮名と連綿を組み合わせてすることで文節を示す。

伝後鳥羽天皇筆本拾遺集は定家自筆本や算合本と近いと考えられるため、その仮名遣は定家仮名遣に近いことが予想される。試みに伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の4葉の仮名遣を、上記の要点に基づいて確認してみる。

「お」「を」のアクセントの違いによる使い分けについて、「おなじ」「おもはぬ」「おふる」「たまのを」の4例が確認できた。これらはいずれも定家仮名遣によって使い分けられているとされる語であり、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集でもそれが守られている。なお、補助字形「越」「乎」や「きこ江」の使用例は見られなかった。

文節頭、文節末を示す字母についても、定家仮名遣の特徴が看取された。「は(八)」の字母は文節中にも頻出するが、文節頭で使用される例はない。前節で指摘した「た(堂)」の字母は、既出断簡②に2例看取され、いずれも行頭での使用であった。

以上のことから、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の仮名遣は定家仮名遣とおおむね一致するものと言える。「た(堂)」の字母が天福年間に頻出するとされることを勘案すると、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写年代は鎌倉時代天福年間(1223、1224)以降、それに近い時期とすべきではないだろうか。

おわりに

以上、本稿では伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の新出断簡をきっかけとし、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集に対する基礎的な考察を試みた。新出断簡は既出の伝後鳥羽天皇筆本拾遺集と同筆であること、また、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集が算合本系統に属する伝本であり、定家自筆本、算合本に近い関係にあることを確認し得た。後鳥羽天皇宸筆との書法的な共通性が認められること、定家仮名遣が遵守されていることも勘案すると、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の書写年代は鎌倉時代天福年間以降、それに近い時期であることが推測できる。

ただし、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の資料数は非常に限られており、本稿の考察をより確かなものとするた

めには新たな断簡の収集、調査が必要である。今後、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の新たな断簡の発見が予想される。本稿の方法、成果を応用し、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集の実像を少しずつ解明していくことができれば幸甚である。

また、本稿でも取り上げた算合本系統は伝本数が少ないためにその実態が不明瞭である。伝後鳥羽天皇筆本拾遺集はその貴重な一伝本と言えるが、この現存数も少ないため、算合本系統の実態解明には至らない。さらに、伝後鳥羽天皇筆本拾遺集とは別の算合本系統の伝本とされる古筆切の存在も指摘されている。それらを含めた算合本系統に対する総合的な考察を試み、その実態解明に資する成果を得られるよう、今後も追究を続けたい。

注

1. 小松茂美『古筆学大成』第八巻 拾遺和歌集・後拾遺和歌集一(講談社、1989)
2. 前掲注1、362頁を参照。
3. 『大内基康コレクション 興衆愛玩』(筆の里工房、2021)
4. 前掲注1、356頁を参照。
5. 本稿における各断簡の歌番号は、藤原定家筆本拾遺和歌集に対して久曾神昇氏が付した歌番号を参考とした。久曾神昇『拾遺和歌集』別巻(汲古書院、1990)を参照。なお、久曾神氏の付した歌番号は『新編国歌大観』第1巻(角川書店、1983)に付された歌番号と一致している。
6. 古筆了信の極札については、村上翠亭、高城弘一監修『古筆鑑定必携』古筆切と極札(淡交社、2004)所収の鶴飼切(同書29頁)に付された極札を参考とした。
7. 連綿の形式分類については、森岡隆「平安古筆を学ぶための10の基礎知識」(『墨スペシャル』17号、かな創作入門、芸術新聞社、1993、4、5頁)を参照した。
8. 九州国立博物館『特別展 王羲之と日本の書』(西日本新聞社・TNCテレビ西日本、2018)130頁を参照。
9. 片桐洋一『拾遺和歌集の研究』(大学堂書店、1970)
10. 前掲注9に収載される「拾遺和歌集伝本考」(645頁～)を参照。
11. 久曾神昇『藤原定家筆 拾遺和歌集』(汲古書院、1990)
12. 松田武夫『勅撰和歌集の研究』(日本電報通信社、1944)
13. 北野克『算合本拾遺集の研究』(勉誠社、1982)
14. 前掲注13、420～427頁を参照。
15. 前掲注13、413頁を参照。
16. 『静嘉堂稀覯書』6 拾遺和歌集・拾遺和歌抄(静嘉堂文庫、1975)
17. 前掲注13参照。
18. 前掲注1を参照。
19. 森岡隆『第3章 平安中期』(名児耶明『決定版 日本書道史』芸術新聞社、2009)、50頁を参照。
20. 森岡隆『高野切本古今和歌集の復元』(筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻、2011)5頁を参照。
21. 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査」(『情報処理学会論文誌』59巻、2号、情報処理学会、2018)、317頁表1を参照。
22. 前掲注21を参照。

23. 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた『源氏物語』写本の調査」(『じんもんこん2022論文集』、情報処理学会、2022、263～270頁)

24. 前掲注21、321頁を参照。

25. 本稿で参考とした論考を以下に挙げる。

- ・大野晋『仮名遣と上代語』(岩波書店、1982)
- ・小松英雄『仮名文の原理』(笠間書院、1988)
- ・加藤良徳「定家仮名遣再考」(『名古屋大学国語国文学』第82号、1988、43～58頁)
- ・加藤良徳「藤原定家による仮名文書記システムの改新」(『国語学』第52巻1号、2001、31～41頁)

26. 小松英雄氏は定家所用の仮名を基本字形と補助字形に分類し、補助字形を次のように説明している。「同一字形の隣接を避けるなど、主として視覚的变化を与える目的で用いられる字形。」(『仮名文の原理』86頁)

後記

本稿は安田女子大学日本文学会2023年度研究発表会での発表をもとにし、一部内容の補足、修正を行ったものである。本稿の執筆にあたり、新出断簡の実見調査に際して、筆の里工房には格別の配慮を頂きました。筑波大学名誉教授森岡隆先生、安田女子大学教授江口泰生先生には貴重なご意見を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

[2024. 10. 22 受理]

コントリビューター：古瀬 雅義 教授
(日本文学科)

図版典拠

- ・伝後鳥羽天皇筆本拾遺集新出断簡①：筆の里工房ご提供。
- ・伝後鳥羽天皇筆本拾遺集既出断簡②③④：小松茂美『古筆学大成』第八巻 拾遺和歌集・後拾遺和歌集一（講談社、1989）
- ・御手印置文：九州国立博物館『特別展 王羲之と日本の書』（西日本新聞社・TNCテレビ西日本、2018）

資料1 伝後鳥羽天皇筆本拾遺集現存断簡概要 (単位はcm (字数等除く))

断簡No.	①	②	③	④
所蔵 寸法等	筆の里工房	個人蔵 古筆手鑑	個人蔵 古筆手鑑「浜千鳥」	個人蔵 古筆手鑑「もじの関」
本紙(縦)	22.0	20.9	21.2	21.1
本紙(横)	11.5	13.4	14.6	13.5
歌 ^{※1}	16.0	16.8	15.8	15.6
字数 ^{※2}	16 (1) 字	17 字	15(2)字	14(4)字
よみ人知らず	6.0	6.0		
余白(上) ^{※3}	3.0	2.3	2.7	2.9
余白(下) ^{※3}	3.4	1.6	2.7	2.5
行幅	2.0～3.0 で2行	2.0～3.0 で2行	2.0～3.0 で2行	2.0～2.5 で2行
歌番号	766、767 番歌	647～650 番歌	921～924 番歌	1150～1152 番歌
集付	下十六 1.2 後撰 1.0 上四十八 2.0 合点 2.1	後撰 1.0	下五十六 2.0 上五十六 1.9 合点 2.2	佳上五十四 2.5 合点 2.1
極札	13 代古筆了信 縦 14.5 横 2.0	初代古筆了佐 詳細不明	2 代神田道伴 詳細不明	
極印	縦 1.4 横 1.3			

※1 歌の寸法、字数は1行目を計測 ※2 字数の()の中は漢字数 ※3 余白は歌の1行目の上下を計測

資料2 伝本系統異同対照表

[illegible]

資料3 算合本系統伝本異同対照表

[illegible]

資料4 伝後鳥羽天皇筆本拾遺集使用字母一覧

文字	字母	断簡			
		①	②	③	④
あ	安	3	4	2	0
い	以	1	2	1	1
う	宇	0	2	2	4
え	衣	0	0	0	1
お	於	2	1	0	0
か	可	3	1	1	1
	加	0	0	0	1
き	畿	0	4	3	5
	支	0	0	0	1
く	久	3	0	2	3
け	介	1	2	3	4
	計	0	0	0	1
こ	己	2	4	1	2
さ	左	2	1	1	0
	佐	0	0	0	1
し	之	5	3	5	2
	志	0	0	0	1
す	寸	1	1	2	0
せ	世	0	1	0	0
そ	曾	2	2	1	2
た	多	2	6	1	2
	堂	0	2	0	0
ち	知	0	0	2	0
つ	川	3	3	2	3
	徒	1	0	0	0
て	天	1	0	1	2
と	止	5	5	2	3
な	奈	4	4	3	1
に	尔	2	4	2	4
ぬ	奴	2	2	1	0
ね	祢	1	1	1	0
	年	0	0	0	1
の	乃	3	9	4	5
は	者	2	4	0	0
	八	5	3	3	3
	盤	0	1	0	0

文字	字母	断簡				
		①	②	③	④	
ひ	日	0	0	1	1	
	比	1	1	1	1	
ふ	不	0	2	2	3	
へ	部	0	3	1	0	
ま	末	0	4	0	0	
	万	0	0	0	2	
	満	0	1	0	0	
み	見	0	1	0	0	
	三	1	3	0	1	
	美	1	2	0	1	
む	武	0	1	1	0	
め	女	1	0	2	0	
も	毛	5	4	1	2	
や	也	1	1	0	2	
ゆ	由	0	0	1	4	
よ	与	2	2	1	2	
ら	良	1	1	2	2	
り	利	0	2	5	7	
る	留	4	4	2	6	
れ	礼	2	2	3	1	
ろ	呂	0	0	1	0	
わ	和	1	2	3	1	
を	遠	1	1	2	1	
ん	无	1	1	0	0	
字母数総計		60	36	44	39	40